保育士・教員養成課程における音楽理論の理解と簡易伴奏法の習熟度について（2）

―「音楽Ⅲ」における授業改善から見えるもの―

武田恵美*

1．はじめに

「音楽Ⅲ」の集団授業では、基礎的な音楽理論を理解し、四つの長調（ハ・ヘ・ト・ニ）のコードネームによる簡易伴奏法を学習する。その到達目標は、①コードネームを用いて左手の簡易伴奏ができるようになる、②移調奏を含み、子どもの声域に合わせた弾き歌いができるようになる、の２点である。

筆者はこれまで、保育・教育現場で簡易伴奏を用いた弾き歌いを行うには、音楽理論を十分に理解した上でピアノの演奏技術が必要であると考え、音楽理論の理解を深める講義を展開してきた。そして、2016年度から2018年度に実施した授業では、簡易伴奏法で必要となる音楽理論を講義したのち、四つの長調の主要三和音とコードネームの関係性や移調、伴奏の応用について講義と演習を行った。また、各授業の始めには、前週までの授業内容を復習し、学生への定着を試みた。

これまでに、武田（2019）において、簡易伴奏の技術習得を目指し、その練習方法を明らかにした。そして、学生が演奏技術を習得するためには、講義の時間を短縮して演習の時間を延長することが望ましい形であると結論付けている[1)]。

本稿では、2019年度前期に実施した「音楽Ⅲ」の集団授業の時間配分をまとめ、第15週で実施した確認試験（筆記②・実技②）の結果を前年度と比較した。そして、時間配分の改善から見られる学生の音楽理論の理解度、簡易伴奏法の習熟度の変化について考察する。

2．研究目的

授業の時間配分の改善から見られる音楽理論の理解度、簡易伴奏法の習熟度について分析する。また、その結果から今後の課題を明らかにすることを目的とする。

3．研究手順

(1)「音楽Ⅲ」の集団授業における講義と演習の時間配分をまとめる。
(2) 第15週で実施した確認試験（筆記②・実技②）の結果を集計し、前年度の結果と比較する。
(3) (2) の比較から音楽理論の理解度、簡易伴奏法の習熟度をはかる。
(4) 今後の授業内容、時間配分、授業展開の方法を検討する。

なお、本研究は、「音楽Ⅲ」の確認試験（筆記②・実技②）80名を対象としている。

* 東海学園大学教育学部　非常勤講師

4. 研究概要

4－1. 授業内容の時間配分と比較

「音楽Ⅲ」の集団授業における授業内容と授業時間配分をまとめ、前年度と比較する。そして、前年比を（　）内に示し、該当しない部分に「－」を付している（表1）。但し、学生が目にするシラバスには、確認試験（筆記①・実技①）、確認試験（筆記②・実技②）を記載していない。しかし、確認試験（筆記①・実技①）としてハ長調主要三和音と伴奏付けの確認を、また、確認試験（筆記②・実技②）として移調と伴奏付けの確認をそれぞれ行った。なお、学生には、第１週の授業説明で周知している。

表1　授業内容の時間配分

週	シラバス（授業計画）	時間配分（分）			
		2019年		2018年	
		講義	演習	講義	演習
1	授業説明	－	－	－	－
2	和音とは・音名	40（±0）	0（±0）	40	0
3	調性	40（±0）	0（±0）	40	0
4	ハ長調主要三和音	30（－5）	10（＋5）	35	5
5	ハ長調主要三和音とコードネーム	25（－7）	15（＋7）	32	8
6	ハ長調主要三和音の演習	20（－5）	20（＋5）	25	15
7	ハ長調コードネームで伴奏付け	20（＋5）	20（－5）	15	25
8	ピアノ実技試験	－	－	－	－
9	ハ長調主要三和音と伴奏付けの確認：確認試験（筆記①・実技①）	35（実技試験を含む）		35（実技試験を含む）	
10	いろいろな調の主要三和音とコードネーム１	30（－4）	10（＋4）	34	6
11	いろいろな調の主要三和音とコードネーム２	22（－3）	18（＋3）	25	15
12	ヘ長調とニ長調主要三和音の演習	20（±0）	20（±0）	20	20
13	移調と伴奏付け	20（－5）	20（±10）	25	10
14	様々な伴奏形	20（±0）	20（＋5）	20	15
15	移調と伴奏付けの確認：確認試験（筆記②・実技②）	35（実技試験を含む）		35（実技試験を含む）	
16	定期試験	－	－	－	－

4－2. 確認試験（筆記②）の内容と結果

確認試験（筆記②）は、前年度と同じ問題で実施した。また、平均値には、前年比を（　）内に示している。

問１：調判定の結果は、以下のとおりである（表２）。

表2　問１の結果

問題番号	内容	2019年度			2018年度		
		正解率（%）	不正解率（%）	無解答率（%）	正解率（%）	不正解率（%）	無解答率（%）
(1)	ヘ長調の調判定	97.5	2.5	0	100.0	0	0
(2)	ニ長調の調判定	95.0	5.0	0	96.6	3.4	0
(3)	ハ長調の調判定	95.0	5.0	0	98.9	1.1	0
(4)	ト長調の調判定	97.5	2.5	0	97.8	2.2	0
	平均値	96.3（－2.0）	3.8（+2.1）	0（±0）	98.3	1.7	0

（小数点第二位以下四捨五入）

問２：基礎知識の結果は、以下のとおりである（表３）。

表3　問２の結果

問題番号	内容	2019年度			2018年度		
		正解率（%）	不正解率（%）	無解答率（%）	正解率（%）	不正解率（%）	無解答率（%）
(1)	主音の理解	93.8	5.0	1.3	88.8	11.2	0
(2)	和音の理解	87.5	11.3	1.3	94.4	3.4	2.2
(3)	主要三和音の理解	96.3	3.8	0	100.0	0	0
(4)	音名の理解	93.8	6.3	0	93.3	6.7	0
(5)	調号の理解	87.5	11.3	1.3	80.9	15.7	3.4
(6)	調号（♯系）の理解①	98.8	1.3	0	100.0	0	0
(7)	調号（♯系）の理解②	96.3	3.8	0	97.8	2.2	0
(8)	調号（♭系）の理解①	97.5	2.5	0	97.8	2.2	0
(9)	調号（♭系）の理解②	87.5	12.5	0	80.9	19.1	0
(10)	移調の理解	97.5	2.5	0	96.6	3.4	0
	平均値	93.6（+0.6）	6.0（－0.4）	0.4（-0.2）	93.0	6.4	0.6

（小数点第二位以下四捨五入）

問３：主要三和音のコードネームの結果は、以下のとおりである（表４）。

表4　問３の結果

問題番号	内容	2019年度			2018年度		
		正解率（%）	不正解率（%）	無解答率（%）	正解率（%）	不正解率（%）	無解答率（%）
(1)	ハ長調のコードネーム	98.8	1.3	0	100.0	0	0
(2)	ニ長調のコードネーム	95.0	2.5	2.5	96.6	3.4	0
(3)	ヘ長調のコードネーム	95.0	3.8	1.3	95.5	4.5	0
(4)	ト長調のコードネーム	98.8	0	1.3	100.0	0	0
	平均値	96.9（－1.1）	1.9（－0.1）	1.3（+1.3）	98.0	2.0	0

（小数点第二位以下四捨五入）

問４：楽譜の読み取り（A）の結果は、以下のとおりである（表５）。

表5　問４の結果

問題番号	内容	2019年度			2018年度		
		正解率（%）	不正解率（%）	無解答率（%）	正解率（%）	不正解率（%）	無解答率（%）
(1)	調判定	98.8	1.3	0	98.9	1.1	0
(2)	和音記号の理解	92.5	7.5	0	95.5	4.5	0
(3)	移調とコードネームの理解	88.8	8.8	2.5	88.8	11.2	0
	平均値	93.3（－1.1）	5.8（+0.2）	0.8（+0.8）	94.4	5.6	0

（小数点第二位以下四捨五入）

問５：楽譜の読み取り（B）の結果は、以下のとおりである（表６）。

表６　問５の結果

問題番号	内容	2019年度			2018年度		
		正解率（%）	不正解率（%）	無解答率（%）	正解率（%）	不正解率（%）	無解答率（%）
(1)	調判定	97.5	2.5	0	100.0	0	0
(2)	和音記号の理解	95.0	5.0	0	95.5	4.5	0
(3)	移調とコードネームの理解	90.0	7.5	2.5	97.8	2.2	0
	平均値	94.2（－3.6）	5.0（+2.8）	0.8（+0.8）	97.8	2.2	0

（小数点第二位以下四捨五入）

４－３．確認試験（実技②）の内容と結果

確認試験（実技②）は、前年度と同じ問題、同じ方法で実施した。前年比を（　）内に示している。試験結果は、以下のとおりである（表７）。

表７　確認試験（実技②）の結果

評価	基準	2019年度		2018年度	
		問１の結果（%）	問２の結果（%）	問１の結果（%）	問２の結果（%）
５点	和音の音変更がスムーズであり、構成音を正しく演奏することができる。	66.3（+18.0）	55.0（+13.4）	48.3	41.6
４点	和音の音変更はスムーズでないが、構成音を正しく演奏することができる。	8.8（－11.4）	20.0（－8.1）	20.2	28.1
３点	学生自身が音のミスに気づいており、やり直すことはあるが構成音を正しく演奏することができる。	6.3（－8.3）	8.8（－3.6）	14.6	12.4
２点	和音の構成音を間違えている部分がある。	11.3（+0.1）	13.8（+0.3）	11.2	13.5
１点	和音の構成音を間違えている部分があり、演奏することができない。	5.0（－0.6）	0（－2.3）	5.6	2.3
０点	演奏できない。	2.5（+2.5）	2.5（+0.2）	0	2.3
	計	100.0	100.0	100.0	100.0

（小数点第二位以下四捨五入）

５．研究結果と考察

５－１．2019年度と前年度の時間配分の比較

第２、３、12週は、同じ時間配分で授業展開した。第４-６、10、11週は、講義を短縮し演習を延長して授業展開した。これは、講義で行う復習の内容を精査したことによって時間を短縮でき、演習を延長することができたからである。第13週は、講義を５分短縮し演習を10分延長して授業展開した。これは、講義で行う復習の内容を精査したことによって時間を短縮でき、演習を延長することができたからである。但し、前年度は、定期試験の告知の時間をとったため35分で授業展開していた。第14週は、講義の時間を維持し、演習を５分延長して行った。但し、前年度は、確認試験（筆記②・実技②）の告知の時間をとったため35分で授業展開していた。第７週は、講義を５分延長し演習を５分短縮して授業展開した。これは、確認試験（筆記①・実技①）に向けて第２-６週の復習に時間を要したからである。

５－２．確認試験（筆記②）

問１の平均正解率は96.3%、平均不正解率は3.8%、平均無解答率は０%であった。（1）の不正解率は2.5%であった。不正解者の解答は、全てが「ヘ調長」であった。調性は理解できているが文字を誤って書いた、または、文字列を理解できていないと考えられる。（2）の不正解率は5.0%であった。不正解者の解答は、「ニ調長」、「ト長調」、「ハ長調」であった。「ニ調長」は、調性は理解できているが文字を誤って書いた、または、文字列を理解できていないと考えられる。「ト長調」は、＃系の調性であることは理解できているが、調号の数を理解できていない可能性が考えられる。また、「ハ長調」と解答した全ての学生が（2）と（3）を入れ替えて解答していることから、問題用紙を見間違えた可能性が考えられる。（3）の不正解率は5.0%であった。不正解者の解答は、「ハ調長」、「ニ長調」であった。「ハ調長」は、調性は理解できているが文字を誤って書いた、または、文字列を理解できていないと考えられる。また、（2）と同様、「ニ長調」と解答した全ての学生が（2）と（3）を入れ替えて解答していることから、問題用紙を見間違えた可能性が考えられる。（4）の不正解率は2.5%であった。不正解者の解答は、全てが「ト調長」であった。調性は理解できているが文字を誤って書いた、または、文字列を理解できていないと考えられる。

問２の平均正解率は93.6%、平均不正解率は6.0%、平均無解答率は0.4%であった。（1）の不正解率は5.0%、無回答率が1.3%であった。不正解者の解答は、「根音」であった。主音は各音階の始まりの音、根音は和音の最低音であることから、主音が根音と考えられる場合もあるが、主音と根音を混同していると考えられる。（2）の不正解率は11.3%、無解答率は1.3%であった。不正解者の解答は、「ハーモニー」、「不協和音」、「重音」、「調和」、「長音階」、「響音」、「異響」、「キレイ」であった。「ハーモニー」、「不協和音」、「重音」、「調和」は、和音に関係する用語であることから、和音に関係するものであることは理解できていると考えられる。「長音階」は、楽音を一定の基準にしたがって音高の順に並べたものであることから、和音の概念[2]を理解できていないと考えられる。また、「響音」、「異響」は、問題文から推測したと考えられる。「キレイ」は、和音の概念を理解できていないと考えられる。（3）の不正解率は3.8%であった。不正解者の解答は、「和音記号」、「主音三和音」であった。「和音記号」は、和音を表すための記号であることから、主要三和音の概念[3]を理解できていないと考えられる。「主音三和音」は、主要三和音と言葉の響きが似ていることから、間違えて覚えている可能性が考えられる。（4）の不正解率は6.3%であった。不正解者の解答は、「ニ調」、「明調」、「ホ長」であった。「ニ調」は、ニ音が主音を表していることは理解できているが、長音階を表す「長」が入るべきところに「調」が入っていることから、調性の表記を理解できていないと考えられる。「明調」は、問題文から推測したと考えられる。「ホ長」は、イタリア語表記の音名を理解できていないと考えられる。（5）の不正解率は11.3%、無解答率は1.3%であった。不正解者の解答は、「和音記号」、「符号」、「長音階」、「コードネーム」、「拍子」、「音階記号」、「調子記号」と様々であった。「和音記号」、「符号」、「コードネーム」は、記号であることから記号で思いついたものを解答したと考えられる。「長音階」は、音階の種類、「拍子」は、リズムに関係する用語であることから調号について理解できていないと考えられる。「音階記号」、「調子記号」は、音楽用語[4]として用いられない言葉であることから、問題文から推測したと考えられる。（6）の不正解率は1.3%であった。不正解者の解答は、「シ」であった。「シ」は、調号に♭が一つ付く場合に調号を付ける音であることから、調号の配置を理解していないと考えられる。（7）の不正解率は3.8%であった。不正解者の解答は、「シ」、「ミ」であった。「シ」は、調号に♭が一つ付く場合に調号を付ける音であることから、調号の配置を理解していないと考えられる。「ミ」は、調号に♭が二つ付く場合に最後に調号を付ける音であることから、調号の配置を理解していないと考えられる。（8）の不正解率は2.5%であった。不正解者の解答は、「ファ」、「レ」であった。「ファ」は、調号の配置（調号を付ける音、付ける順）を理解していないと考えられる。「レ」は、調合の配置（♯または、♭を付ける音）を理解していないと考えられる。（9）の不正解率は12.5%であった。不正解者の解答は、「ド」、「レ」、「ファ」、「ソ」であった。♭系の調号は講義で習

得しているが、演習ではヘ長調のみ取り上げたため、変ロ長調については理解が深まらず、不正解率が高くなったと考えられる。また、調号は、♭系の場合は完全５度下がった音、♯系の場合は完全５度上がった音にそれぞれ調号を付ける。不正解者の中で、「ファ」と解答した学生が最も多いことから、調号の配置を理解していない学生がいると考えられる。（10）の不正解率は2.5％であった。不正解者の解答は、「転調」、「変調」であった。「転調」は、曲の途中で調が変わることであるのに対し、移調は曲の調性を変えることであることから、移調と転調を混同して覚えていると考えられる。「変調」は、音楽用語では用いられないことから、問題文から推測したと考えられる。

問３の平均正解率は96.9％、平均不正解率は1.9％、無解答率は1.3％であった。（1）の不正解率は1.3％であった。不正解者の解答は、「Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ」であった。「Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ」は、和音記号であることから、コードネームの概念[5]が理解できていないと考えられる。（2）の不正解率は2.5％、無解答率は2.5％であった。不正解者の解答は、「D・A・B」であり、主和音のコードネームは理解できているが、下属和音と属和音の英語表記される音名を間違えて覚えている、主和音から下属和音、属和音を数え間違えている、主要三和音の概念が理解できていないと考えられる。（3）の不正解率は3.8％、無解答率は1.3％であった。不正解者の解答は、「F・B・C」、「F・B♭・C」、「D・G・B」であった。「F・B・C」は、下属和音のコードネームが理解できていないと考えられ、「F・B♭・C」は、「B♭」の表記を間違えて覚えていると考えられる。また、「D・G・B」は、主和音と下属和音がニ長調になりヘ長調が理解できていない、もしくは（2）と解答欄を誤って記入したと考えられる。さらに、属和音のコードネームが理解できていないと考えられる。（4）の不正解率は０％、無解答率は1.3％であった。これは、ト長調の主要三和音のコードネームを理解できていないと考えられる。

問４の平均正解率は93.3％、平均不正解率は5.8％、無解答率は0.8％であった。（1）の不正解率は1.3％であった。不正解者の解答は、「ト調長」であった。調性は理解できているが文字を誤って書いた、または、文字列を理解できていないと考えられる。（2）の不正解率は7.5％であった。不正解者の解答でコードネームを解答した学生は、（2）と（3）の解答欄を誤って記入していると考えられる。イタリア語表記の音名で解答した学生は、コードネームを英語表記の音名であると誤った認識をしていると考えられ、コードネーム、和音記号の概念[6]を理解できていないと考えられる。「G」を「Ⅴ」、「C」を「Ⅰ」と解答した学生は、問題の曲の調性を理解していない、調性によってコードネームの表す和音の機能が異なることが理解できていないと考えられ、調判定やコードネームが理解できていないと考えられる。（3）の不正解率は8.8％、無解答率は2.5％であった。不正解者の解答で和音記号を解答した学生は、（2）と（3）の解答欄を誤って記入している、コードネームの概念が理解できていないと考えられる。ハ長調のコードネームで解答した学生は、調判定を理解できていないと考えられる。ヘ長調の下属和音のコードネームを「B」、「B♭」と解答した学生は、コードネームについて理解できていないと考えられる。全く違ったコードネームを解答している学生は、調判定、移調、和音記号、コードネームの中で、理解できていない内容があると考えられ、授業内のつまずきを是正する必要がある。

問５の平均正解率は94.2％、平均不正解率は5.0％、無解答率は0.8％であった。（1）の不正解率は2.5％であった。不正解者の解答は、「ヘ調長」であった。これは、調性は理解できているが文字を誤って書いた、または、文字列を理解できていないと考えられる。（2）の不正解率は5.0％であった。不正解者の解答で、イタリア語表記の音名で解答した学生は、コードネームを英語表記の音名であると誤った認識をしていると考えられ、コードネーム、和音記号の概念を理解できていないと考えられる。「Ⅳ」を「Ⅵ」と書いた学生は、和音記号を誤って覚えていると考えられる。「F」を「Ⅳ」、「C」を「Ⅰ」と解答した学生は、問題の曲の調性を理解していない、調性によってコードネームの表す和音の機能が異なることを理解できていないと考えられ、調判定、コードネームが理解できていないと考えられる。（3）の不正解率は7.5％、無解答率は2.5％であった。不正解者の解答で、和音記号で解答した学生は、（2）と（3）の解答

欄を誤って記入している、コードネームの概念が理解できていないと考えられる。「F」をそのまま「F」、「C」をそのまま「C」と解答した不正解者は、（2）で解答した和音記号からコードネームを導きだしていると考えられる。このことから、コードネームについては理解できているが、調判定を理解できていないと考えられる。解答に疎らに誤りがある学生は、調判定、和音記号、移調、コードネームの中で、理解できていない内容があると考えられ、授業内のつまずきを是正する必要がある。

５－３. 確認試験（実技②）

問１の評価５点は66.3％、評価４点は8.8％、評価３点は6.3％、評価２点は11.3％、評価１点は5.0％、評価０点は2.5％であった。評価５点及び評価４点を合わせると75.1％になる。これは、長調の主要三和音、主要三和音の和音記号が理解できており、簡易伴奏を行う演奏技術を習得できたと考えられる。評価３点は、長調の主要三和音、主要三和音の和音記号は理解できているが、簡易伴奏を行う演奏技術を習得することには至らなかったと考えられる。評価２点、評価１点及び評価０点を合わせると18.8％になる。これは、長調の主要三和音、主要三和音の和音記号が理解できておらず、簡易伴奏を行う演奏技術を習得することには至らなかったと考えられる。

問２の評価５点は55.0％、評価４点は20.0％、評価３点は8.8％、評価２点は13.8％、評価１点は０％、評価０点は2.5％であった。評価５点及び評価４点を合わせると75.0％になる。これは、指定された調に移調する音楽理論が理解できており、コード伴奏を行う演奏技術を習得できたと考えられる。評価３点は、指定された調に移調する音楽理論は理解できているが、コード伴奏を行う演奏技術を習得することには至らなかったと考えられる。評価２点、評価１点及び評価０点を合わせると16.3％になる。これは、指定された調に移調する音楽理論が理解できておらず、コード伴奏を行う演奏技術を習得することには至らなかったと考えられる。

５－４. 試験結果の比較

確認試験（筆記②）の結果を前年度の結果と照合し比較する。問１の正解率は2.0％減、不正解率は2.1％増、無解答率は同じであった。不正解率が増加したことから、調判定について理解が不十分である学生が増加していると考える。問２の正解率は0.6％増、不正解率は0.4％減、無解答率は0.2％減であった。いずれも1.0％未満の増減であることから、基礎知識の理解については殆ど同じであると考える。問３の正解率は1.1％減、不正解率は0.1％の減、無解答率は1.3％の増であった。不正解率は僅かに減少しているが、無解答率が増加したことから、主要三和音のコードネームについて理解できていない学生が増加していると考える。問４の正解率は1.1％の減、不正解率は0.2％の増、無解答率は0.8％の増であった。不正解率及び無解答率が僅かに増加したことから、読譜が不十分である学生、理解できていない学生が僅かに増加していると考える。問５の正解率は3.6％の減、不正解率は2.8％の増、無解答率は0.8％の増であった。不正解率及び無解答率が増加したことから、問４と同じく読譜が不十分である学生が増加し、理解できていない学生が僅かに増加していると考える。

確認試験（実技②）の結果を前年度の結果と照合し比較する。問１の評価５点及び評価４点は6.6％の増、評価３点は8.3％の減、評価２点、評価１点及び評価０点の学生は2.0％増であった。評価５点、評価４点の学生が6.6％増加していることから、長調の主要三和音、主要三和音の和音記号が理解できており、簡易伴奏を行う演奏技術を習得できた学生が増加していると考える。また一方で、評価２点、評価１点及び評価０点も増加していることから、音楽理論が十分理解できておらず、簡易伴奏を行う演奏技術を習得できなかった学生も増加していると考える。問２の評価５点及び評価４点の学生は5.3％の増、評価３点は3.6％の減、評価２点、評価１点及び評価０点の学生は1.8％減であった。評価５点及び評価４点の学生が5.3％増加していることから、移調しコード伴奏を行う演奏技術を習得できた学生が増加していると考える。

6. まとめと課題

本研究において、2019年度の授業時間配分の変更及び内容の検討を行った。その結果、授業時間配分の変化により確認試験（筆記②・実技②）の結果に変化がみられた。授業時間の改善により集団授業における講義は、4時間47分、演習は2時間33分となった。前年度と比較すると、講義は24分の短縮、演習は34分の延長となった。

確認試験（筆記②）は、問1、問3、問4及び問5において、前年度より理解が不十分である、もしくは理解できていない学生が増加していると考える。この結果より、講義を短縮したことによって、音楽理論の理解度が低い学生が増加したと言える。しかし、前年度と同様、全ての観点において正解率の平均値は90.0％を超えており、時間を短縮しても学生の音楽理論の理解度が高いこともわかった。

確認試験（実技②）は、問1、問2ともに簡易伴奏を行う演奏技術を習得できた学生の増加が見られた。評価5点及び評価4点の学生が増加し、その割合は75.0％に達している。また、評価5点の学生が著しく増加し、問1では18.0％増、問2では13.4％増となった。また、評価2点、評価1点及び評価0点には大きな変化が見られない。このことから、演習時間を延長したことによって、簡易伴奏を行う演奏技術を習得できた学生が増加したと言える。

これまでの比較から、時間配分の僅かな変化によって、学生の音楽理論の理解度、簡易伴奏法の習熟度にも変化が見られることが明らかになった。しかし、授業時間内で指導をするには、授業内容に優先順位をつけ、効率的に授業展開する必要があると考える。また、コードネームによる簡易伴奏法を学習する前に、音程、和音の基本形と転回形を学ぶ必要があると考える。

筆者は、保育・教育現場において、音楽理論が十分に理解できていても演奏技術が備わっていなければ「うたう活動」を援助、指導することはできないと考える。今後、授業進行の見直しをはかり、学生が理解しやすい言葉遣いや伝え方を模索しなくてはならないと考えている。

註釈

1）武田恵美「保育士・教員養成課程における音楽理論の理解と簡易伴奏法の習熟度について―「音楽Ⅲ」における集団授業の実践をとおして―」，東海学園大学教育研究紀要第3巻，pp.93-101, 2019.

2）授業内で、「和音とは、高さの異なる三つ以上の音が同時に響いた音である。」と指導している。

3）授業内で、「主要三和音は、各音階の1番目の音、4番目の音、5番目の音を根音として作られた和音を基本形とし、それぞれ、一度の和音（Ⅰ）・四度の和音（Ⅳ）・五度の和音（Ⅴ）と言う。」と、指導している。

4）音楽の様々な事項を説明するために使われる専門用語である。強弱記号、速度記号、発想記号を含む。

5）授業内で、「アルファベットの大文字で表記される音名と、アルファベットの小文字と数字で表記される和音の種類を記号として扱うものである。」と、指導している。

6）授業内で、「音階の各音を根音として三和音を構成し、主音を根音とした三和音から順にⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶとローマ数字の大文字で和音を表す記号である。」と、指導している。

参考文献

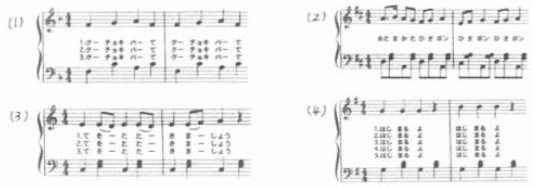
1：木許隆，荒井弘高，岩佐明子，大塚豊子，高御堂愛子，田中知子，土門裕之，藤本逸子『小学校教諭・保育者をめざす 音楽の基礎 改訂版』圭文社，2018.

【参考資料】

音楽Ⅲ　クラス授業　定期試験

クラス	木4 金1 / 金2	学籍番号		氏名	

❶(1)～(4)の楽譜を見て、それぞれ何調か答えなさい。但し、全て長音階の曲である。



(1)	(2)	(3)	(4)

❷（　　）に当てはまる語句を書きなさい。

(1)それぞれの調の、音階の始まりの音を（ ① ）という。
(2)高さが異なる音が同時に響くと（ ② ）になる。
(3)それぞれの調の　1度の和音、4度の和音、5度の和音 は重要で（ ③ ）とよばれる。
(4)主音が“レ”の明るい響きの音階は（ ④ ）調 である。
(5)その曲が何調であるかを一目でわかるようにした記号を（ ⑤ ）といい、(⑤) は、楽譜の音部記号(ト音記号、ヘ音記号等)のすぐ横に書かれる。
(6)調号が♯1つの場合、♯を付ける音は（ ⑥ ）であり、♯2つの場合は (⑥) と（ ⑦ ）である。
(7)調号が♭1つの場合、♭を付ける音は（ ⑧ ）であり、♭2つの場合は (⑧) と（ ⑨ ）である。
(8)ある曲を、1曲丸ごと別の調に移動することを（ ⑩ ）という。

(1)	(2)	(3)	(4)　　調	(5)
(6)	(7)	(8)	(9)	(10)

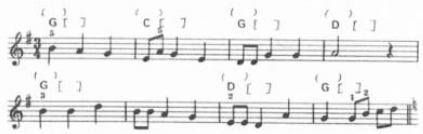
❸主要三和音について答えなさい。

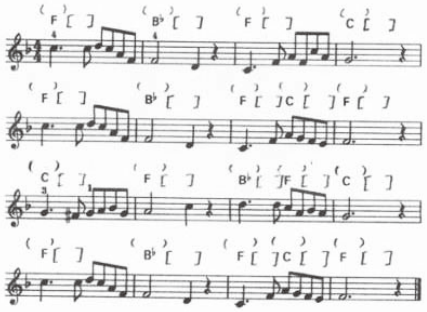
(1)ハ長調の主要三和音をコードネームで表しなさい。
(2)二長調の主要三和音をコードネームで表しなさい。
(3)ヘ長調の主要三和音をコードネームで表しなさい。
(4)ト長調の主要三和音をコードネームで表しなさい。

(1)			(2)		
(3)			(4)		

❹楽譜を見て答えなさい。

(1)この曲は何調ですか。　（　　）
(2)コードネームの横の【　】に、和音記号を書きなさい。
(3)この曲を“ヘ長調”に移調した時のコードネームを、（　）に書きなさい。



❺楽譜を見て答えなさい。

(1)この曲は何調ですか。　（　　）
(2)コードネームの横の【　】に、和音記号を書きなさい。
(3)この曲を“ハ長調”に移調した時のコードネームを、（　）に書きなさい。